

スペインに学ぶ

民主党無所属ネット議員団・スペイン行政調査団

大阪府議会議員 中村哲之助

私たち府議会民主党無所属ネット議員団は、04年3月25日(木)～4月1日(木)にかけてスペインを訪問し、福祉・医療のあり方、都市政策と公共事業・産業政策などの先進的成功事例を学ぶことができました。

私にとってスペインは初めてで、この視察期間中、「百聞は一見にしかず」の言葉をこれほど現実に感じたことはありませんでした。また、現地関係者やガイドなどの説明・懇談などを通じて、スペインの人達の暮らしの実態や考え方の違いなどを知ることができ、都市政策を進める上での「基本」のあり方などで大きな成果を持ち帰ることができました。私たちはこの成果を、今後の府政運営に少しでも生かせるよう努めなければならないと思います。

以下、私の日記風「スペイン訪問記」です。

このレポートは、訪問先の人口や財政・言語など、年鑑や統計資料などによって誰もが容易に把握できるものはあえて省略しました。訪問先で学んだこと、また現地を訪問したものでしか知り得ないこと、わが国と同じことが何故こんなに違うのか？というように、気付いたことを中心にまとめています。少し長いですが、ぜひお読みください。

出発・一路スペインへ(3月25日)

午前9:00 関空に集合し、午前11:00 発のK L 868 便で一路ヨーロッパへ。途中、オランダ・アムステルダムスキポール空港を経て、スペインのバルセロナへ向かいます。飛行時間の大半はシベリアの上空で、眼下に時々見える景色は「雪と氷」に覆われた白一色で、見事です。



アムステルダムのスキポール空港へ着いたのは、現地時刻の午後2:25です。ここでの乗り継ぎは約2時間待ちで、少し余裕があります。

スキポール空港に到着して、数え切れないほどの航空機や広大なエリア・行き交う様々な民族衣装などを見て、改めて、ヨーロッパのハブ空港としての存在感が伝わってきます。



ラウンジでコーヒーなどを飲んで少しくつろいだ後、現地時刻の午後4:30発、K L 1673便でバルセロナへ向かいます。時差が8時間ありますので、到着は午後6:30(日本では、3月26日午前2:30)。やっぱり疲れます。へとへとです。特に、バルセロナ空港では着陸態勢に入りながら再び上昇し、着陸待ちで周辺上空を約15分程度も飛行したため、余計にそう感じるのでしょうか。入国手続きなどを終え、空港を出て、専用バスでホテルに着いたのはもう午後8:30になっていました。

現地ガイドとして私たちを迎えてくれたムツダ氏は、「この日は7年ぶりの寒波で、バルセロナでは昼食時に数分間にわたって『ヒョウ』が降った。暖かいことには慣れていても、雪やヒョウには不慣れで、所々で交通事故も起こり、そのための渋滞がひどい」と説明。比較的暖かいといわれながら、もしかしてと思ってトランクに入れてきた「冬用」の下着類がどうやら役立ちそうです。

ホテルは空港から近い、Melia Barcelonaで、部屋は広くゆったりとして、少しリッチな気分になります。

NGOが役所をリード(3月26日)

この日は、午前中は世界遺産に登録されたグエル公園とバルセロナのオリンピック施設見学、午後はNGO団体と懇談し、その活動を学ぶことになっています。時差の関係でどうも熟睡ができず、少し体が重く感じられます。

建築家ガウディの作品であるグエル公園は、元々分譲住宅を予定したものが、まったく販売見通しが立たないため、今日の姿を残すことになったようです。吹田市の万博跡地にある太陽の塔の作者・岡本太郎氏はここで長く学んだようで、その作品の原型がここにあります。またこの先、何百年と工事が続くだろうと言われる「聖家族教会」の工事現場は多くの人達が訪れ、宗教の持

つ力のすごさに圧倒されます。

公共事業への考え方

バルセロナ五輪のメインスタジアムやプールなど、巨大施設を見学しましたが、ここで全員が感心するのは、「競技が終わった後の対策」についての説明です。

例えば、わが国で少し前、日韓共催でのサッカーW杯が開かれ、各自治体が我も我もと誘致に励みました。そして、競技が終わった後、その施設の維持管理に今では手を焼き、大きな財政負担になってしまっています。バルセロナ市ではこれを防ぐため、様々な計画の下に建設され、現在は民間に運営を全面的に任されていますが、十分に採算ベースに乗り、地域の利用も結構あるようです。メインスタジアムでは、地元の高中生やプロのサッカー試合はもとより、著名な音楽家の利用などで賑わうとともに、観光コースにもなり、その面でのメリットも大きいとか。

また、会場の建設に当っては、できるだけ自然を破壊しないようにとの配慮から、道路の舗装一つにしても、写真のように、家庭ゴミとして出される空き瓶や、解体現場のコンクリート片などを材料として使用しています。これなら、一部が凹んだり壊れたりしてもそんなに目立ちませんし、修理もその部分だけで簡単です。



世界遺産とオリンピック施設を視察した私たちは、バルセロナ市の港湾局が置かれている海岸へ向かい、ここでNGO団体のエコ・メディテラネア(以下、MT)の活動家とお会いし、バルセロナ市の環境政策とNGO団体の活動実態の説明を受けました。特に、活動は、

- 地中海の海水を美しくするための取り組み
- 港湾の事業が都市住民に及ぼす影響への対策
- 公共事業への積極的な提言
- 環境専門家の育成

などに力点を置いているとのことで、これらの具体的説明に私たちは驚きの連続でした。

とりわけ、セメント・石炭ガラなどの積み下ろしの際に、粉塵がどうかたちで飛散するのか、それを分析し、そのためにどこへフェンスを張ればよいか、完全に遮断するための密閉化への取り組みなどを、MTが市港湾局へ強く働きかけ、今では逆に、市役所からMTが仕事を依頼され、港湾の事業者が適正に仕事をしているか、他に新たな問題は生じていないかなど、日々を忙

しく活動しているとのことでした。

さらにその後、バルセロナ市民が気管支炎で悩む比率が全国平均よりも高く、何らかの問題があるのではないかと調査した結果、大豆の積み下ろしの時期にそれがよく発生することが判明（大豆に含まれるプロテインによる）。そのため、

大豆を扱う船をすべて密閉型にする

市が病人の追跡調査を始める

市は大豆の積み下ろしに伴う様々なルールをつくる

などの「官・業・民」合同の取組みが始まったということです。当時、誰一人として、大豆が気管支炎の原因になっているなどと思ってもいなかっただけに、大変な成果だったと思います。

わが国では、民は官の言うことを聞かされ、役所のルールに従わなければならないという風潮が極めて強いだけでなく、むしろ「世間から注目される大きな活動をする団体は目障りだ」と言わんばかりの言動や、時には排他的な行為さえも見られるだけに、MTの先進的な活動と、これを支える国民性に頭が下がります。



最近では、船舶からのオイル流出対策、汚泥が堆積し始めた河川の流路変更対策、産業廃棄物と不法投棄対策などにも積極的に取組み、また一方で、地中海沿岸の他団体との交流も盛んで、そのリーダー的な役割も果たしているとのことです。今後の益々の活躍を祈ります。

バルセロナ市の都市政策

私たちの公式に計画した日程とは別に、現地ガイドとの話し合いや、現地の姿そのものを見ることも大きな課題です。バルセロナ市で特に気付いたことなどを少しまとめてみました。

少子化と労働力・暮らし

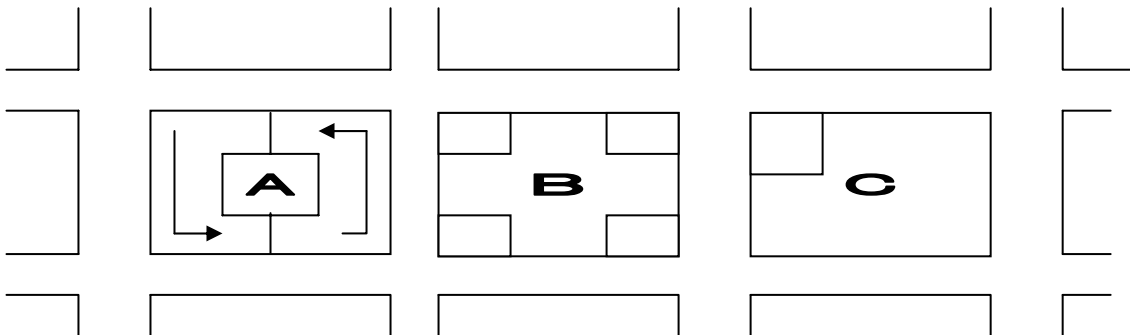
スペイン全土の合計特殊出生率（以下、出生率）は今、1.0～1.1 だということです。わが国よりもさらに少子化が進み、このままでは大変なことになるとうと、危機感が強いことを知らされました。このため、慢性的な若年労働力不足に陥っており、海外特に中南米やモロッコなどからの移民も相当数に上っています。これがまた、現在の雇用情勢と絡み、一層複雑な状況を生み出しているようです。わが国のこれからのことを考えると、他人事ではありません。

また、極端な少子化は住宅事情にも大きく影響しています。スペインの持ち家率は約 90% ですから、ほとんどが持ち家と考えられます。つまり、出生率が 1.0~1.1 ということは、新婚夫婦が将来、親が所有する家のどちらかに住んだとしても、一方の家が余ることになります。そのため、スペインではわが国のように、生活費の中から多額の「住宅費」を出費しなくてもよく、さらに医療費・教育費はほとんど無料ということで、この面でも生活費の構成はわが国と大きく異なっています。

スペインの平均的な所得は 20 万円~30 万円で、消費税は日本の約 3 倍です。実際には中間管理職クラスが 40 万円程度で、大半のサラリーマン・職人・単純労働者は平均的に 10 万円余りのようです。この国は完全な職能給ですから、経験年数の長短で所得はほとんど変わらず、わが国の勤労者に比べると、かなり所得水準は低いものになっています。しかし、前述のような理由で、生活水準は結構高く感じます。

高齢者に優しい街づくり

また、町は高齢者の生活を守るために、一周 100~150m 程度 (A, B, C などのそれぞれの区画) のエリアに、薬局、雑貨屋、食料品店、理・美容店などの日常生活の上で必要なものは、



ほぼ配置されるようなつくりになっています。大きなアパート・マンションはほとんど 1 階が店舗、2 階は事務所などで、住居部分は 3 階以上です。

また、そのような観点から、市の政策として、旧市街地内では大型店舗の進出規制をかけ、町内で永年続いてきた「小さな個人商店=小売店」を擁護する姿勢を打出しています。郊外へ出かけると、日本と同様の大型スーパーを時々見かけますが、スーパーといえども、日曜日は営業を許されていません。

わが国では何でも規制緩和され、大規模店舗やコンビニの進出ラッシュで、街の中に古くからある市場や個人商店が衰退していくのは大違いです。郊外のスーパーへ買い物に行けない高齢者にとって優しい、「都市政策・暮らしの基本」を、私たちは今後、スペインの制度に倣ってつくり上げていかなければならないでしょう。

なお、スペインなどのヨーロッパの国々では、私たちの言う 1 階は 0 階 (L 階・G 階などの表示もあり)、2 階は 1 階と呼んでいます。

都市交通の見直しへの取組み

私は 2 日目の朝、比較的早く目が覚めたので、何か新しい発見はないかと、カメラを持ってホテルの周辺を散歩しました。

この街にはケバケバしたネオンや広告もなく、実に落ち着いた、通勤・通学の人達の朝の風景です。日本のような交通渋滞とまではいきませんが、それでも結構、車は多く、混雑しています。そのような中で、トラムが空っぽで走行しているのに遭遇しました。これはバルセロナ市街の交通体系を見直そうとして、現在、トラムの導入のための「試運転」だということです。日本と同様に、この地域でも「市電」がかつては重要な乗り物であったのが、時代の流れの中で次第に車に主役を奪われ、ついには廃止されてしまったトラムを、もう一度、主要な都市交通機関として復活させようという計画です。

昨年、フランスのストラスブルヘトラム(LRT)の視察に出向いているだけに、アレツという思いが強く、そのトラムが停止する駅の状況はどうなっているのかを見に行きました。プラットフォームは道路から約20cmの高さで、緩やかなスロープが設けてあり、車イスでも楽々と乗車できるストラスブルとそっくりです。各国の中心都市は一様に、「車の洪水」による交通機能低下に悩み、次代の都市交通のあり方を検討し、具体的な施策の必要性に迫られていることに気付きます。後に、このことを現地のガイドに質問すると、本格的な営業が実現するまで並大抵ではないようです。



これは一体どう説明すればよいのか？

私たちの視察は、近距離の移動は専用バスで行いますが、視察目的地・港湾局の近くにある「ジプシー村」の隣の公園で、「異様な風景」を目撃しました。それは、いわゆる「注射」をしているのです。荒れ果てた公園・広場のようなところで、10人、20人以上が固まって交代で注射をしているような風景は異様としか言いようがありません。

このことが早速、バスの中で話題になり、帰りのバスでもう一度ここを通り、これをゆっくり視察しました。現地通訳の説明では、彼らはエイズなどに侵されているようで、街の中で時々、注射器を持って人に近づき、「この針を刺されたくなければ金を出せ」と、強盗のようなことをする者がかなり出てきたため、市が「治安・感染防止」の両方の立場から、彼らを一カ所にまとめ、軽い成分の注射液と注射器を支給し、これで一般市民の生活を守っているとのこと。始めて見た異様な風景に、ひょっとして日本でも と、心配になります。

移動日・グラナダへ向かう（3月27日）

今回の視察は、府議会の日程が当初よりもずれたことなどから、約1週間の視察の真中に、土・日曜日が入りました。この日と翌日の28日は土・日曜日ということで、官庁や各種団体などを訪問する計画はなく、世界遺産を観光資源としてどう活用しているのか、また現地の暮らしや街づくりなどはどうなっているのかなどを視察することになっています。

朝早くモーニングコールが予定されていましたが、6時前に目が覚め、この間の資料整理をするとともに、トランクに入れてきた趣味の時代小説を取り出して、1時間半ほど読書しました。閑空からの機中での読書以来、小説を読むのは2日振りです。8時少し前、朝食のために食堂へ行くと、何人かの議員が既に食事中です。「初日は何か食欲が出なかったけれど、2日目になると少し楽ですね」と、話される議員もおられ、私自身も連泊はかなり楽だなと思います。しかし、全員が一様に、「ハムやソーセージを始めとする食品はなぜこんなに塩辛いのか」と言います。私も同じ感じを持っていましたが、こんなに塩分の多いものを毎日食べて、この国の人達は大丈夫なのかと、心配さえてしまいます。

ヨーロッパ風の朝食は、ほとんどのホテルで「野菜」を出さないことが普通です。しかし、今回は事務局長の配慮で、ヨーロッパのホテルでありながら、アメリカンスタイルのバイキング料理を提供するホテルを選んでいただいたため、野菜などが出ていて、今回は大助かりです。

9時少し前にホテルを出発し、次の訪問地・グラナダへ向かうため、バルセロナ空港へ。交通渋滞もほとんどなく、約10分余りで到着します。今日は国内移動であるため、出国・入国などのわずらわしい手続きは一切なく、スムーズに進みます。ところが搭乗して、予定の出発時刻を過ぎても肝心の飛行機がなかなか離陸しません。何が原因なのか、言葉が判りませんから、ただ待つだけです。20分余り遅れて、午前11:27に離陸したIB1254便は、スペインの南の都市グラナダへ向け、緯度で約4度分を南下します。

飛行時間は約2時間で、途中で食事なども出されますが、好きなチーズを一口と、コーヒーを飲んだだけで、今朝の小説の続きを読みました。上空から見える前方のシエラネバダ山脈の山々の頂（いただき）はまだ雪に覆われ、眩しく感じられます。とりわけ背の高いのが、イベリア半島の最高峰・ムラセン山=3482mでしょう。また眼下の景色は広大な平原で、オリーブの木で埋め尽くされていると言ってもいいほどです。



午後0:35にグラナダ空港に到着です。この空港はターンテーブルもたった一つだけしかない、本当に小さな空港で、日本の地方空港と同じような風景です。

日本をKLMで出発した時から気付いていたことですが、外国の航空会社の国際線は、日本のJALやANAと違って、客室乗務員はかなりの高齢者が就いています。IB1254便はスペインの国内線ですが、それでも同様に、日本よりは比較的年齢層が高いように思います。女性の勤務実態の違いがそのまま反映されています。

空港では現地ガイドの坂野氏が出迎えられ、私たちはバスで世界遺産のアルハンブラ宮殿とヘナリーフェ庭園の視察に向かいます。これらの概要は、世界遺産解説書や旅行ガイドなどにも掲載されていますので省略しますが、イスラム世界とキリスト教徒たちの、長い宗教上の理由で続いた戦争の歴史を思い出させます。今日、世界各地で民族や宗教の違い・富の配分などをめぐって多発する紛争が、どれほど根深いものかを改めて教えられた気がします。

アンダルシア州の第4番目の主要都市であるグラナダは、標高700mの高さにあり、アスパラガス・タバコ・レンズ豆などがよく栽培されています。また、移動中、車窓からは白ボプラが植林されているのを時々見かけます。ガイドの説明では、この木は余り手をかけなくても7~8年で大きくなり、すぐに良い値段で売れるので、この地域では誰もが好んで植林しているようです。また、タバコはスペイン全土の27%をアンダルシア地域で生産しています。

昼食はスペイン風のオムレツ（写真=日本のジャガイモ入りお好み焼きという感じ）です。ここでもやはり食事を始めるのは、1時半頃からで、ようやくこの食事時間に慣れてきました。



レストランなどがある地域は異常とも言えるほどの「違法駐車」で、日本の二重駐車などは、まだおとなしいくらいです。ただ、車道や歩道には、かなりの数のペットボトルやビンを入れる相当大きな「緑のゴミ箱」が置かれています。写真でも分かるように、これだけ大きなものなら誰でも目に付きますし、少々ではいっぱいになりません。私の地元・枚方市をはじめ府内の各地域でも、ペットボトルを回収するボックスが市内に何ヶ所か設置されていますが、50~100mくらいの中にも必ずあるのとは大違いで、これからのゴミ対策として、大変参考になりました。



アルハンブラ宮殿などを約2時間見学した後、私たちはグラナダ名産の寄せ木づくりの工場・販売店を視察しました。世界各国からアルハンブラ宮殿を訪れる観光客に「アルハンブラ名産」として買ってもらい、この地域の産業として定着させたいとのことですが、金額的にも割合高価なもので、購入する客も少なく、思惑どおりにはいっていないのではないかという印象を強くしました。店内も閑散としています。

この後、宿泊先のHotel Corona Granadaへ。夕食はお決まりのように午後8時過ぎからです。またこの日は、私たちが食事をしている隣のバンケットルームで、現地の2組の新郎新婦を囲む「披露宴」が合同で行われ、スペイン風の結婚披露宴を垣間見ることができました。さながら、日本で行われる政治家の立食風のパーティによく似た形式で、比較的地味なものです。新婦は最後まで「お色直し」はしていませんでしたし、礼服のようなものを着ている人は見かけません。小学校へ入学したくらいの男児2～3人が、蝶ネクタイをして着飾っていたのが印象的なくらいです。スペインの人たちはそんなに背が高くありませんが、2人の新婦はともに背が高く、175cm位はあったでしょう。若い2組の前途に幸多いことを祈ります。

夕食後、希望者は9時半から、グラナダの丘陵にあるフラメンコ・ショーを約1時間、鑑賞しました。20分程度で到着した洞窟で行われるショーは、発祥の地と言われるだけに、すごい迫力で、ダンサーの汗が飛んできますし、狭い洞窟（幅4m、奥行き20m程度）のため、ステップの時、足を踏まれそうな気さえます。ショーが一通り終わって外へ出ると、次の客が雨の中をじっと待ち続けています。やはり大変な人気なのでしょう。私たちも大満足で、ホテルへ帰ると既に11時半を回っていました。雨は深夜までしとしとと降り続けています。

スペインの農業と歴史を知る（3月28日）

28日も朝6時頃に目を覚ましました。しかし、28日の深夜・午前2時をもって「夏タイム」に入ったため、昨日までの時刻でいけば、まだ午前5時です。寝る前に時計の針を1時間進ませたため、何か1時間丸々損をした気がします。

添乗員が夏タイムの時間調整から、「もしも」のことを考えて、ホテルにモーニングコールを

依頼しておいたので、7:30に電話機が鳴ると思っていたのに無音。ホテルの男性がそれぞれの部屋を、リストを見ながらノックして早足で回っている姿を見て、何かと聞くと、電話システムの故障とか。

この日はセビリヤ(セビージャ)から来たガイドの北原氏が、アンダルシア地方の案内と様々な問題を説明します。スペインは農業大国で、この地域ではオリーブが主要生産物です。途中、オリーブ一筋で生計を立てている「バエナ村」を視察し、1本の木には平均約80~100kgの実を付けることを知らされました。スペインのオリーブ生産量は世界の約45%程度を占め、世界屈指です。移動中、車窓からの風景は見渡す限り、オリーブ、オリーブの畑です。



このオリーブの収穫には毎年多くの労働力が必要になり、収穫期には大変な数の外国人労働者が出稼ぎにやってきます。東ヨーロッパや北アフリカが中心で、時間給は約600円です。生食用は10~11月に収穫し、色は緑色。黒色の油用は12月以降に収穫します。

オリーブをめぐるのは、収穫時の外国人労働者の問題だけではなく、4~5月にかけての「花粉症」が、最近では大問題になり、特にひどいときは室内でも「メガネ」が曇ってしまう時があるようです。

約2時間でコルドバに着き、ロンドン橋を見学した後、「旧ユダヤ人街」を訪れ、かつての迫害の歴史の説明を受けました。余りに激しい迫害のため、今では誰一人この地には住んでいないようで、心が痛みます。

コルドバといえば「メスキータ=コルドバ大聖堂」です。ここはかつて、イスラム教寺院として建設されたものですが、今ではキリスト教の教会として、多くの観光客が訪れます。いっぱい実を付けたオレンジの木で埋まっている中庭などを見学した後、私たちはこの町の人たちが町をあげて観光客を誘致するために取組んでいる「花いっぱい」運動の現場を視察しました。

写真のように、それぞれの家がベランダや壁・庭に思い思いの花を常に育て、観光客の目を楽しませ、そのことで町の美化を進めるもので、「美しい花の町並み」として、世界各地の雑誌などでも紹介されているそうです。わが国でもこれにならって、観光資源を大切に、地域を上げてそれを盛り立てていく取組みがもっと必要だと痛感します。



午後3時過ぎにコルドバを発ち、一路セビリアへ。170km、約2時間の移動です。セビリアには午後5時に到着し、世界遺産のセビリア大聖堂を見学しました。この遺産は、イスラム風の部分、キリスト的な部分が混在し、往時を偲ばせます。さらに、ここには1492年、アメリカ大陸を発見したコロンブスの棺も安置されています。日本人観光客も結構多く、大聖堂を熱心に興味深く見学していました。

ホテルへ向かう途中、車中から「セビリア万博」が開かれた時の建築物と、スペイン広場を見学しました。広場では、よくアメリカ映画のロケが行われるようで、最近では「スターウォーズ・エピソード」が撮影されたようです。なお、万博当時のポルトガルのパビリオンは現在、自国の領事館として使用されています。この日は一日、激しい雨でぐっしょり、本当に疲れました。ホテルは Occidental Sevilla、部屋は広く、隣室の音が響くこともなく、快適な部屋でした。

首都・マドリードへ(3月29日・朝)

セビリアで迎えた初めての朝、しかし、もう移動です。この日はスペイン新幹線=AVEで首都のマドリードへ向かいます。出発時刻の8時でもまだ少し薄暗く、日本の夜明けよりは約2時間遅い感じです。「マドリードは雪が降って、スリップする車が交通事故を次々に起こしているようですよ」と、ガイドの説明。今日は最高気温でもC7°とか。

5分余りで SANTA JUSTA (サンタ・フスタ) 駅に着いた私たちは、スペインの今の置かれている状況に早速、驚きます。つまり、3月11日、多数の死傷者を出した首都での列車爆破事件以来、手荷物検査などがとりわけ厳しくなっているのです。飛行機に搭乗する時とまったく同じと思えば間違いありません。写真のように、トランクはそれぞれ AVE に乗車する本人が検査台へ持って行き、手荷物なども検査を受け、私自身は金属探知機を通過します。警察官か鉄道員なのかは不明ですが、モニター画面とにらめっこの職員は大変でしょう。この検査台の周囲には警察官1人、荷物を扱っている者2人、さらに空港と同じ麻薬担当の犬とその担当職員というように、列車に乗車する人の検査を、いくら安全対策のためとはいっても、これだけの人を配置するだけで、どれほどの余計な経費を必要とするか、本当に大変です。わが国でこんなことになら

ないよう、政治家の責務は益々重くなっていく気がします。



スペイン新幹線(AVE)に乗車するのは勿論初めてで、列車の到着や発車を知らせる合図やアナウンスは一切ありません。ガイドから、「間違いのないように、早めに席についてください」と言われていたので、10分近く前に全員が乗車。日本の新幹線なら、発車の10分前くらいに駅へ着いていたら大丈夫ですが、混雑していたら検査にどのくらいの時間がかかるか分からないため、この国では40分程度は早く駅へ行くようです。

AVE9619号は予定どおり、9時丁度に音もなく発車。数分経つと、周囲は一面、オレンジ、麦、オリーブに被い尽くされます。のどかな田園風景が続くなどというものではありません。わが国なら、どんな田舎へ行っても、2~3分もすれば必ず「人家」があります。けれどもこのアンダルシアの平原は家一つありません。ようやく雨が上がり始めましたが、まだ雲に覆われ、良い天気ではありません。40分近く見なかった家が少し出てきたと思うと、9:41のコルドバ着を、不思議なことに、1~2分前に知らせる車内アナウンスが流れました。しかし、出発を知らせるアナウンスは、ホームでも列車でも一切ありません。

このAVEは結構「掘割構造」になったところが多いなとか、次第に高地になっていくためか耳がおかしいな、また雨が激しくなってきたなどと思いながら、11:30定刻に首都マドリッド・アトーチャ駅に到着です。

ここでは早速、ホームレス対策を学びました。この駅の半分は、コロンブスが持ち帰ったであろうと思われる熱帯植物を植え、熱帯植物園として一般市民に開放しています。また、冬でも大変暖かいことから、職・家のない人たちにコーヒーやサンドウィッチなどを無料で提供し、ここで寛ぐことも認めています。しかし、治安・管理の両面から、横になって寝ることを禁じているだけ(住居にだけはさせない)で、足を投げ出して何時間ここに滞在してもOKだとか。わが国とは大変な国状の違いです。また、ONCE = オンセ(3月30日の部分を参照)という制度による宝くじ売り場も見学しました。



アトーチャ駅



駅にあるオンセの宝くじ売り場

現地ガイドの水久保氏は、「3.11 被害者の皆さんに弔意を表したい」という我々の出発前の依頼に、「現場はすべて片付けられ、花などは置けなくなっている。今では駅の外に一部、地元の人たちが献花している所がある」と言い、そこへ案内していただきました。猛烈な雨が降り続いていましたが、亡くなられた方々のご冥福と、今なお負傷されている方々の一日も早い回復をお祈りします。



首都のマドリードは標高 640mにある人工的に創り上げられた町で、植えられた街路樹だけで 25 万本もあり、首都の 65%は緑で占められています。1 週間前は C 24~25° もあり、泳ぐことさえできたのに、一転して寒波の襲来で、大変なようです。

また、先頃のスペイン総選挙の結果と国民の思いがどんなところにあるのかなどの説明を一通り聞いた後、早速、UDP (Union Democratica De Pensionistas)訪問へ移動です。

1400 支部を持つUDPを訪問(3月29日・昼)

スペイン全土に 1400 支部・85 万人の会員を擁する、NGO団体のUDP(高齢者民主連合)

には午後2:07に到着です。今回の視察団団長・大友議員の挨拶と、先の列車爆破事件の被災者への深い哀悼の意に対し、UDP 役員の Paca Tricio Gómez 氏から、「視察を歓迎する。ぜひ私たちの運動を理解し、日本でも広げてほしい。また、哀悼の意を表していただいた皆さんの温かいお心に、深い感銘を受けた。平和な社会建設へともに力を尽くそう」と挨拶がありました。

UDP の Paca Tricio Gómez 氏は、「誕生して 27 年にもなるが、この運動を進める中で、日本の介護保険制度も大いに勉強し、スペインの国に相応しい制度として、年々遅れているところを整理し、改革している。年金生活者・退職者の老後をどのように安定させるのかということが取り組みの最大テーマだ」と述べ、団体が運営する高齢者への在宅サービス・施設サービスなどの内容を詳細に説明されました。最近では、(退職した途端にガクッとくる人が多いため) 退職者へのオリエンテーリングや、啓発活動・国連関係の文書翻訳などで忙しいようです。

また UDP は、他団体などとの関係を抜きにして活動は成り立たないので、消費者団体・慢性病の会・赤十字・NGO などとのつながりも深く、国の福祉関連評議会の副会長にも役員を派遣しているとのこと。

(写真は UDP 本部役員と握手する中村議員)



レクチャーの後、アビラ県のオヨドピナーレスという地方(人口約 3000 人)にある高齢者の福祉施設 Centro Mayores UDP De Hoyode Pinares (施設定員 23 人・入所者 16 人・職員 14 人)を訪問しました。都心から約 1 時間半の所にある何ともいえない静かな村です。

ヌリア施設長の案内で、施設の中をゆっくり見せてもらうとともに、医師・看護師・ヘルパーなどとの懇談の時間もあり、極めて有意義な訪問でした。

この施設には常時、平均して、介護を要する人が 65% 介護を必要としない人が 35%という割合になっているようです。スペインではこの施設のように 2 人部屋が多く、ご夫婦で入所していることもよくあり、さらに施設の入所者が団樂の時間を多くもてるようにと、談話室・食堂が施設全体の割合から見れば広がっています。日本の施設は個人のプライバシーを守ることに主眼を置き、個室が多く、また部屋も結構広がっているのとは逆です。他は日本の施設と比較的よく似通っています。



一番手前の皿は「どんぐり」を食べさせた豚の生ハムで、非常に高価なものです

施設を一通り見学した後、施設長らはわざわざ、私たちを歓迎するとして「ミニ・ワインパーティ」の席を持たれ、ここでワインやコーヒー・ジュースなどをいただきながら、懇談が続きました。この席上、議員団からは、

- 入所者の平均的な所得や年齢、入所手続き
- 年金の体系と施設の運営予算
- UDP の運営資金と、ボランティアやメンバー確保策
- 本部スタッフの体制
- 国・州などの助成措置
- 夫婦で入所し、一方が死亡した場合の対策

などを尋ねるとともに、年金の約 80%がこの施設での必要額で、残りは個人個人のお小遣いに行っていると聞き、入所者のゆとりを見た思いがします。

私たちがこの日の視察を終えてホテルへ着いたのは、午後 8 時少し前になっていました。今日は本当に朝早くから丸一日、ハードなスケジュールでした。ホテルは今回の視察の中では一番グレードが高いと言う、Madrid Wellington です。

JETROでスペインを知る(3月30日)

いよいよこの日で今回の視察も終わりで、明日は帰国です。スペイン時間に慣れてきたのか、不思議にモーニングコールの 1 時間くらい前に目が覚めます。しかし、今日も雨です。よくこれだけ雨が降ると感心します。地中海地域は本来雨の少ない地域で、普通なら今頃は 20~25° 程度の気温で、暖かい日は泳げるくらいのはずです。何十年ぶりかの異常な寒波のせいでこんなに寒く、雨ばかり。聞くと、私たちが帰った頃から普段の陽気が回復するようです。

この日は午前 11 時に在スペイン・マドリードの JETRO=日本貿易振興会を訪問する約束になっています。そのため、朝一番に、国立プラド美術館を訪ねました。移動時間などを考えると、わずか 1 時間しかないため、ガイドにあらかじめ、有名な絵画などの紹介をしてほしいと依頼してあったので、ゴヤ・グレコ・ベラスケスなどを中心に駆け足で回りました。

レンブラントの夜警(オランダ)、ボッティチェリリのビーナスの誕生(イタリア)とともに、やは

り、世界3大人物画と言われる、ベラスケスの「宮廷の侍女たち」は圧巻です。遠近法・光の魔術は当時、余人の及ぶところではなかったでしょう。また、ヨーロッパ各国の王室の興亡が、プラド美術館が所有する至宝の絵画の中に表現されています。何年か先、もう一度ここを訪れるチャンスがあれば、ぜひ丸一日をとって、ゆっくりと鑑賞したいと思います。

マドリード・ジェットロでは、小笠原ゼネラル・ディレクターに迎えていただきました。ここでも警備は厳しく、写真のようなカードを発行し、一人ひとりがこれをチェックポイントに通して入場します。



入場に必要なカードとジェットロ事務所正面

ここでは、スペインの最近のGDPや消費者物価の上昇率、失業率と移民、対日貿易の実態、日本企業の進出状況、列車爆破事件の政治的影響など、様々なテーマでの説明と質疑が行われました。主な説明と議員団からの質問などの論点は

EU加盟国の拡大と通貨統一の中で、物価が非常に上がったこと。特に住宅の価格が大幅で、ここ数年で、30~40%も上昇していること

少子化に歯止めがかからず、合計特殊出生率は1.0に近づいていること

海外からの労働者の流入と移民の受入

アメリカのイラク攻撃への非難が益々強まっていること

政権党のPP（民衆党）の予想外の総選挙大敗北と社会労働党の躍進

日本企業のスペイン進出290社（内、製造業は67社）の状況

在留邦人約5,400人と日本人の移住の状況

対日貿易上の特徴

ONCE（オンセ）の制度

スペインにおける出産・育児休暇・ などです。

オンセ・休暇制度に驚き

オンセは、非営利団体で、視覚障害者の生活向上を目的とした団体のことで、月曜日から木曜日までの一般的な宝くじと、賞金額の大きい金曜日の宝くじ、年に4回のジャンボ宝くじを全国で販売しています。現在、スペイン全土で23,000人以上の視覚障害者が、オンセの宝くじ販売員として就労しています。

オンセは視覚障害者の社会参加促進をめざし、1938年に創設された公共団体で、現在会員数は64,000人を超えています。わが国でも、障害を持つ人たち、とりわけ視覚障害者の就労・雇用がさらに促進できるよう、このような制度を大いに活用しなければと、全議員が熱心にメモをしていました。

また、スペインの出産・育児休暇は国内法で詳細が定められ、ほとんど守られているようです。出産休暇は6週間で、母親は出産後、必ず6週間の休暇をとらなければなりません。さらに、育児休暇として両親のどちらかは、出産前後に10週間の休暇をとる権利が保障されています。また2人目からは、2週間ずつ休暇期間が追加されます。さらに、父親・母親の両方が同時に5週間ずつ休暇を取ることOKです。わが国の出産・育児制度、そしてこの休暇取得状況と比べると、大きな違いがあることに驚きの連続でした。

さらにスペインは、親族の結びつきが極めて強く、日本で「親戚」の考え方・繋がりが次第に弱まっていくのと正反対です。夏休みは大半の人が1ヶ月連続で取得しますが、その間に、親戚ばかりが一堂に会する日もあるようです。

現在、スペイン国内での3大関心事は、移民 治安 失業率だという説明があり、大阪府の重要テーマである「雇用・安全(治安)」の二つが丸々同じであることに、何かすごい親近感を感じました。

ホテルには午後3時ごろに帰り、これまでにいただいた資料などを整理するとともに、帰国に向けての準備を行いました。私は夕方、少し時間がありましたので、近くにあるマドリード三越へ買い物に出かけました。買い物客は先に5~6人入店していましたが、日本人ばかりです。

スペインとお別れして帰国(3月31~4月1日)

31日はいよいよ日本へ帰ります。朝6:30のモーニングコールになっていましたが、不思議に5:30頃に目が覚めます。もう日本ではお昼をまわっています。朝から全ての荷物を整理するのは大変だからと昨夜、ほぼ整理しておいただけに、7:15までと言われていたバゲージダウンは楽々です。朝食後にチェックアウトし、8:00にはホテルを出発です。マドリードAPには15分程度で到着し、搭乗手続き・免税書類の提出などを行います。

10:30発のKL1700便への搭乗手続きは、やはり少し時間がかかります。さらに10:30発の予定がかなり遅れ、離陸したのは30分遅れの11:00。離陸すれば約2時間で、アムステルダムに到着します。機内では軽食が配られますが、健康管理のため、野菜を少しとチーズ・コーヒーだけです。

スキポール空港でも、午後2:25発の予定が約40分も遅れていることを電光ガイドが知らせています。私たちがKL0867便で離陸したのは、午後3:05。さあ、これから約10時間余りの

長い飛行です。座席は2階の80Jで、周囲はすべて席が埋まっています。厳しい航空事情の中で、ヨーロッパからの関空直行便が相当減ってきているため、これだけ主要路線に集中しているのだなと思います。

時間が経つと記憶が薄れてしまうため、私は今回のスペインの出来事を毎日夜、20～30分くらいかけてメモしていましたが、機内は相当時間が有るので、もう一度整理し直しました。私は旅日記を書くのが好きで、2時間ほどメモするとともに、撮影した写真も不鮮明なものなどを消去していきます。昔と違い、デジカメは本当に便利です。撮影したその場で見ることができますし、一々プリントする必要もないため、費用も大幅に節約できます。しかしそれだけに、今までとは倍くらいの写真をとってしまいます。毎日毎日充電しなければならないのが少し難点ではありますが.....。

帰国便では、「夜」という時間帯が約半分くらいあります。最初はテレビ・ビデオを見ている人たちも結構いましたが、ブラインドが下ろされた頃には、多くはお休みのようでした。私も2～3時間程度休みましたが、ビデオで「ラストサムライ」を2度も見ました（日本語版が少ないため）。

今回のスペインは本当に寒かったし、そして、よくこれだけ毎日雨が降るなというほど「雨」ばかりでした。そして今回の視察では、前回のフランス・イタリアの時と違い、会派の政務調査ですから、議会事務局の随行者がいません。添乗員はいても、やはり大半は個々の議員がやらなければなりません。ポーターが一人もいない空港もありました。そんな中で、全員が当然のように行動しましたが、代表と事務局長のご苦労は大変だったと思い、改めて感謝の意を表します。

また、前回は添乗員が交通事故による骨折のため、現地で入院という緊急事態が起りましたが、今回は何一つ問題も起こらず、本当によかったと思います。

日本に着く約2時間前、真っ暗だった機外が少しぼんやりとしてきます。日の出です。毎日毎日繰り返される当たり前の光景ですが、僅か2～3分程度の美しい瞬間は誰の心も洗います。



関空到着は午前8:36。入国手続きなどを終え、解散。6泊1機中泊の調査団の日程は全部終了です。

今回の視察で気付いたこと

ゴミへの対策が明快

家庭から出る一般ゴミやビン・缶・ペットボトルなどを回収するケースとは別に、バルセロナでは路上に置かれた写真のようなゴミ袋を時々見かけます。これは、結構大きいもので、周囲が約1m・高さ70~80cmくらいの非常に厚手の丈夫な袋です。家庭の壁紙の張替え・部屋の改造などで出てくる廃材などをすべてこの袋に入れ、一杯になったら電話をします。電話を受けたら一両日の内に取りに来てくれるようで、すごく便利です。

この袋は近所のお店に行けば購入でき(3000円程度) その袋代の中に、回収費と処理に要する費用などをすべて含んでいます。自分自身で出したい量に応じて購入し、電話すればよいだけで、一般市民から見れば単純明快です。



何事も自己責任で

スペインは何事をするにしても「自己責任」ですと、現地ガイド・通訳は、たびたび語ります。ベランダの手摺りが壊れていて、2階や3階から子どもが仮に転落しても、それは子どもとその親が悪く、建物の管理責任はまずほとんど問われません。ため池、川、山などどこでも常に、自らが責任を持って行動することが大切で、わが国とは大違いです。

私たちは、日本とりわけ大阪の様子を常に把握しておこうと毎日、新聞切抜きを FAX してもらっています。丁度、私たちがスペイン滞在中に、日本で子どもが回転ドアに挟まれて死亡するという痛ましい事故がありました。ガイドは「回転ドアに問題がなかったか、また全国の遊具を点検」と言う記事を見て、「なぜ日本は、こんなことを言うのか。子どもの面倒を見ていなかった親にこそ一番の責任があるはずだ。機械も時には故障するし、ドアに挟まれるかもしれないなどと言うことは誰でも知っている。不思議な国だ」と、厳しい表情で語っていました。

私は「スペインの方々の日頃の生活習慣などに基づいて言われることは分かりますし、あなたが言われるように、もっと自己責任という考え方が必要です。しかし、日本ではそうじゃないんです」と、説明しました。この後、スペインと日本の価値観や自己責任論の違いが大いに話題になりました。考えてみると、ガイドが、「グエル公園」の坂道でも、「ホテルの回転ドア」でも、「プラド美術館の濡れた滑りやすい石畳」でも、「気をつけてください」とばかり言っていたの

は、「もし滑ってもそれは気をつけなかったあなたの責任ですよ」ということを伝えていたのでしょう。スペインの人たちの言うことすべてが正しいわけではありませんが、私たちも「自己責任」についてもっと学ぶ必要があると思えてなりません。

道路にガソリン・スタンド

私たちがジェット口を退出し、表へ出た時、わずか20～30分の距離のところ、なんと「道路」上に、セルフサービスのガソリン・スタンドが設けられています。わが国では、危険物であるガソリンをこんな形で販売するなどというのは考えられないことで、正しく「自己責任」という現地の人の言葉が、何となく分かった気がします。

道路にあるガソリン・スタンド



列車爆破事件に見る国民性

190人もの死者と1700人もの負傷者を出したマドリードの列車爆破事件は、今もなお深い痛みとして、スペイン全土の人たちに残っています。特に、首都のマドリードでは、写真のような「弔意」をしめす黒いリボンが飾られているのをよく目にします。

また、この事件はスペインの政権を一夜にして崩壊させ、イラクへの派兵反対・ブッシュ政権の無謀なイラク攻撃を激しく非難しました。イラク戦争といわれますが、実態は大義名分のないアメリカのイラクへの一方的な攻撃です。わが国の自衛隊派遣も、「戦闘地域ではない安全な場所」であったはず。国民の政治への意思表示の違いが端的に現れていると思います。

しかし、国民性という言葉だけで解決できる課題ではありません。スペインやアメリカ・イギリスのように、政権政党がだめだと思えば大胆に、今度は野党を政権につかせようとする考えには、それに応えられる政党が存在しているからです。小泉政権がこれだけミスを犯しているのに、国民の支持率が今なお高いのは、野党である民主党の存在そのものがまだまだ頼りなく、国民が政権を任せようということまでには至っていないからでしょう。私たち民主党が、一日も早く国民から信頼される政党にならなければと、決意を新たにしました。

このレポートについてのお尋ねは、下記へどうぞ。

- ・大阪府議会議員 中村哲之助事務所 Tel 072-844-8888 Fax 072-844-4444
- ・大阪府庁民主党無所属ネット議員団控室 Tel 06-6941-0219 Fax 06-6941-8411